

## [ラルフ・W・ハリス]「聖霊」

### IV. 信者の中における聖霊

ローマ人への手紙 8 : 1-16

これまでの章において私たちは、旧新両約聖書に記されている聖霊の性質と働きについて述べて来た。ここでは非常に個人的な聖霊の働きについて述べることにする。

個々人の生活の中における霊的な働きは聖霊によってなされる。神との和解への第一歩は聖霊の働きへの応答としてなされる。それから救いが始まる。信者のさまざまな経験を通して聖霊は神の御旨を、クリスチャンのために行なうのである。



#### 聖霊は罪を認めさせる

まず第一に、罪人に自分の失われた状態を気づかせる、聖霊の働きである「認罪」ということを考えよう。人間は自分からすすんで神に来ることは決して出来ない。イエスは「私をつかわされた父が引かないなら、だれも私に来ることは出来ない」と言った。一体、父が引くとはどんなことであろうか。神は聖霊の働きを通して人々をイエスのもとに行かせるのである。

人々に、神のもとに行かなければならないということを感じさせるために、聖霊はどんな方法を用いるであろうか。ヨハネ 16 : 8-11 はそれを私たちに示している。罪人がまず必要とすることは、罪に目ざめることである。人間はキリストを信じないゆえに、はじめから罪人であることを認めさせることによって、聖霊はこのことをなさる (ヨハネ 16 : 9)。

その他の非難が罪人に対してあびせられたとしても、それらのひとつとして前述のことほど効果的なものはない。彼は人間が墮落した時に人類の血の中に注ぎこまれた罪によって、自分もその性質を持つ者であることに気がつくかも知れない。犯した罪に気がつくかも知れない。罪の道を歩いていることの愚かさを認めるかも知れない。また永遠の審判について震えおののくかも知れない。しかし、これらはひとつとして、キリストを信じないという大きな罪を知らせるようには、人間の悩む心を扱うことは出来ないであろう。

聖霊が人々に迫るのはこの点である。しかし、彼は手きびしく起訴する検事のような非難をするのではない。人々に罪を認めさせることは何かきびしく、荒々しいことのように考えるがそうではない。罪に目ざめることは、しばしば私たちに、みじめさを味わわせるが、それは聖霊の働きによるものではない。人々を説得し、身代りとして死んだ救い主を示し、また同時に神の御子を拒んだ大きな罪を知らせて、彼らに迫り、悔い改めに導くところ、聖霊のやさしさである。

聖霊はまた世に、義すなわちキリストの義を示すものである。

イエスの敵は彼を罪人として非難したが、死よりの復活は彼の正しさを証明した。ローマ1：4には、ふたたび聖霊の主要な働きの分野を示している。

最後に聖霊はさばきについて人々の目を開くのである。

「この世の君がさばかれるからである」(ヨハネ16：11)。サタンはこの世の支配者として、あらゆる面において人間を支配してきた。しかし、キリストはカルバリにおいて悪魔に勝利した。キリストは人々を自由にする事が出来るお方である。聖霊の働きは、彼らがサタンの支配から自由になる事が出来るということ、人々に確信させることである。

## 聖霊は新しく生まれさせる

人間が罪、義、さばきについて目ざめると、次には新しく生まれることが必要となる。

新しく生まれることによってのみ、人間は神の子となるのである。古い性質の改善では、神の子となることは出来ない。それもまた、先天的に悪である。人は最初のアダムの性質を持っているのである。そこで人は第二のアダムの性質にあずかる必要がある。

イエスはユダヤの指導者、ニコデモに対して新生の意味について説明した。それでもニコデモはその説明を理解出来なかったので、イエスはほかの言葉で言い直して、「だれでも、水と霊とから生まれなければ、神の国にはいることはできない」と言った(ヨハネ3：5)。

イエスが言ったことを端的に説明すれば、人間はきよめられることと生かされることが必要だというのである。人間の心は罪によって汚されているので、きよめられなければならない。人間は霊的に死んでいるので、新しい生命を受けなければならないのである。

「霊によって生まれる」という表現は、ニコデモにとって聞きなれないことであった。

そこでイエスは、「風は思いのままに吹く。どこから来て、どこへ行くかは知らない。霊から生まれる者も、それと同じである」と説明した。聖霊がどのようにして罪人のうちに

来て、彼をキリスト・イエスにあって新しく造られた者とするかを、詳細に説明出来る人はいない。人間の根本的な欲望、すなわちその内なる動機の変化を分析出来る人はだれもいない。また聖霊に導かれている生活の結果を、予測出来るものはいないのである。しかし、原因と結果とは実に明白なことである。

## 聖霊はきよめる

きよめということ自体、大きな問題であり、ここで語りつくすことは出来ない。ここで強調することは、[聖霊はきよめをもたらすお方である](#)ということである。

元来、「聖別」とは物または人を神のきよい奉仕のために分離しておくという、神の行為をいうのである。事実、旧約時代においては、祭司、レビ族は神に仕えるために分離されていた。また定められた器具は幕屋、あるいは神殿における特別な用途のためにきよめられ、分離しておかれたのである。新約時代における「聖別」は主として[人間を罪から分離して、神の働きのために備えること](#)をさしている。

この聖霊の働きはしばしば罪に関して用いられ、消極的な面で考えられているが、この真理の積極的な面は多く使われていないとはいえ、同じように大切なことである。罪から分離されることだけでは真空にしたような状態である。[そこで今度は満たされる、すなわち神のために備えられることが必要](#)なのである。

信者は神の性質にあずかるものとされたとはいえ、古い性質、自我は依然として彼のうちに見いだされるのである。そしてそれらは自己を主張し、その人全体を支配しようと努めるのである。肉の性質に身をゆだねることは、敗北のクリスチャン生活をするのである。内なるあがきを十分に知らないことは、クリスチャンを完全に敗北させてしまう。

[私たちは敵なる自我、古い性質の存在を認める時、内なるすばらしい味方である聖霊の存在をも認めるべきである。私たちは聖霊の力によって勝利することが出来るのである。](#)

肉なる性質が私たちの生活において自己を主張し、聖霊の働きを砕こうとする時、聖霊は肉の働きにうち勝つ力を与えてくださる。肉は霊的死をもたらすところの肉のわざを生み出す。一方、[聖霊はキリストの性質の要素である霊の実を結ばしめるのである。きよめの必要に対する答えは聖霊に古い性質を支配していただくために、その願いを砕いていただくと同時に、完全にきよめられたお方であるキリストの御姿（みすがた）を、私たちの中に現わしていただくことである。](#)

## 信者は聖霊に満たされる

聖霊のバプテスマについては後の章において述べるが、ここにおいては、このことは聖霊がすべての信者に行なおうとしている働きであることを注意しておく。

- 聖霊はすべての罪人に働いてその罪を認めさせ、神に来たすべての人を新しく生まれさせる。
- 聖霊はすべての信者の生活においてきよめの働きを行ない、
- そして、すべての信者が聖霊に満たされるように願っているのである。

## 聖霊は病をいやす

人間はエデンの園において罪を犯した時、肉体的に死ぬものとなった。やがて肉体の贖（あがな）いの日に、罪の結果である死は取り除かれるであろう。その間に私たちは聖霊の働きを通してその日の前兆を見るのである。

よみがえりの力をもって私たちを栄化してくださる聖霊こそ、私たちの肉体にいやしをもたらす神の代行者なのである。これはひとつの大きな主題であるが、いやしは聖霊によってもたらされるのである。

## 聖霊は天にたずさえあげる

歴史上、最も驚くべきことが、近い将来において起こるであろう。

主は天から下り、キリストにある死人はよみがえり、生きている聖徒は彼らと共に空中で主に会うであろう。

死者と生者の肉体は同じように変えられるであろう。

どのようにして起こるのであるだろうか？…すばらしい聖霊がこのことを行なうのである。